

## ベクトルおよび部分空間の直行性

ベクトルの長さ

$n$ 次元ベクトル  $x = [x_1 \ \cdots \ x_n]$  の長さ  $\|x\|$  は

$$\|x\|^2 = x_1^2 + x_2^2 + \cdots + x_n^2$$

の正の平方根

ベクトルの内積

$$x^T y = [x_1 \ \cdots \ x_n] \begin{bmatrix} y_1 \\ \vdots \\ y_n \end{bmatrix} = x_1 y_1 + \cdots + x_n y_n$$

ベクトルが直交するとき内積は**0**

### 2.5.1

```
clear
x = [1,4,0,2]'
```

```
x =
     1
     4
     0
     2
```

```
y = [2,-2,1,3]'
```

```
y =
     2
    -2
     1
     3
```

```
x_lng = 1^2 + 4^2 + 2^2
```

```
x_lng =
     21
```

```
y_lng = 2^2 + 2^2 + 1^2 + 3^2
```

```
y_lng =
     18
```

```
dot(x,y) % x'*y
```

```
ans =
```

## 2.5.2

$\begin{bmatrix} 1 & 0 \end{bmatrix}$  と  $\begin{bmatrix} 1 & 1 \end{bmatrix}$  は独立だが、直交していない

$\begin{bmatrix} 0 & 0 \end{bmatrix}$  と  $\begin{bmatrix} 1 & 1 \end{bmatrix}$  は直交しているが独立でない

## 2.5.3

$$\frac{x_2}{x_1} \times \frac{y_2}{y_1} = -1$$

$$\frac{x_2 y_2}{x_1 y_1} = -1$$

$$x_2 y_2 = -x_1 y_1$$

$$x_1 y_1 + x_2 y_2 = 0$$

ここで、

$$x^T y = x_1 y_1 + x_2 y_2$$

なので、

直交性の条件と等しい

## 2.5.4

$$B * B^{-1} = I$$

なので  $i \neq j$  ならば  $I_{ij}$  は 0 でなくてはならない

よって直交している

## 2.5.5

```
clear
v1 = [1,2,-2,1]'
```

```
v1 =
     1
     2
    -2
     1
```

```
v2 = [4,0,4,0]'
```

```
v2 =
     4
     0
```

4  
0

```
v3 = [1, -1, -1, -1]'
```

```
v3 =  
    1  
   -1  
   -1  
   -1
```

```
dot(v1,v2)
```

```
ans =  
    -4
```

```
dot(v1,v3)
```

```
ans =  
     0
```

```
dot(v2,v3)
```

```
ans =  
     0
```

## 2.5.6

```
clear  
x = [1,1,1]'
```

```
x =  
    1  
    1  
    1
```

```
y = [1, -1, 0]'
```

```
y =  
    1  
   -1  
    0
```

```
syms u v w  
b = [u;v;w]
```

```
b =  
 $\begin{pmatrix} u \\ v \\ w \end{pmatrix}$ 
```

```
eqn1 = dot(x,b) == 0
```

$$\text{eqn1} = u + v + w = 0$$

$$\text{eqn2} = \text{dot}(y, b) == 0$$

$$\text{eqn2} = u - v = 0$$

$$u = v$$

$$2v + w = 0$$

$$w = -2v$$

$$\begin{bmatrix} 1 \\ 1 \\ -2 \end{bmatrix} v$$

よって  $\begin{bmatrix} 1 \\ 1 \\ -2 \end{bmatrix}^T$  の乗数倍が直交  
また単位ベクトルは

$$\begin{bmatrix} \frac{1}{\sqrt{3}} & \frac{1}{\sqrt{3}} & \frac{1}{\sqrt{3}} \\ \frac{1}{\sqrt{2}} & -\frac{1}{\sqrt{2}} & 0 \\ \frac{1}{\sqrt{6}} & \frac{1}{\sqrt{6}} & -\frac{2}{\sqrt{6}} \end{bmatrix}$$

## 直交部分空間

部分空間  $V$  と  $W$  が直交する条件は「 $V$  のすべてのベクトル  $v_n$  が  $W$  のすべてのベクトル  $w_n$  と直交している」

例

$$v_1 = [1 \ 0 \ 0 \ 0], v_2 = [1 \ 1 \ 0 \ 0]$$

$$w_1 = [0 \ 0 \ 4 \ 5]$$

で張られる空間  $V$  と  $W$  は、 $w_1$  が  $v_1, v_2$  と直交するので直線  $W$  は平面  $V$  に直交している

## 2.5.7

```
clear
v1 = [1,0,0,0]
```

v1 =

1

0

0

0

```
v2 = [1,1,0,0]
```

```
v2 =  
      1      1      0      0
```

```
w1 = [0,0,4,5]
```

```
w1 =  
      0      0      4      5
```

```
syms a  
w2 = [0,0,0,a]
```

```
w2 = (0 0 0 a)
```

```
dot(v1,w2)
```

```
ans = 0
```

```
dot(v2,w2)
```

```
ans = 0
```

```
syms a b c d  
v3 = [0,0,5,-4]
```

```
v3 =  
      0      0      5     -4
```

```
dot(w1,v3)
```

```
ans =  
      0
```

## 2.5.8

$V$ と $W$ が直交するということは、それぞれに含まれるベクトル同士の内積がすべて $\mathbf{0}$ でなければならない

もし、 $\mathbf{0}$ ベクトル以外の共通ベクトルがあると、自身で内積をとることになるが、内積は $\mathbf{0}$ ベクトルでない限り $\mathbf{0}$ にならない

よって、 $V \cap W = \{\mathbf{0}\}$ となる

基本部分空間の直交について

任意の $m \times n$ 行列 $A$ について、零空間と行空間は $\mathbf{R}^n$ の直行する部分空間である

同様に、左零空間と列空間は $\mathbf{R}^m$ の直交部分空間である

例

$$A = \begin{bmatrix} 0 & 1 & 4 & 0 \\ 0 & 2 & 8 & 0 \end{bmatrix} \rightarrow U = \begin{bmatrix} 0 & 1 & 4 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}$$

基底変数は第2列、他が自由変数

この時、順に各自由変数を<sup>1</sup>とおき、 $Ux = 0$ を解くと $A$ の零空間の基底を得られる

$$\begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} 0 \\ -4 \\ 1 \\ 0 \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix}$$

上記定理より、これらはすべて $A$ の行と直交している

また、 $A$ の列空間は<sup>1</sup>次元であり、基底変数の列 $\begin{bmatrix} 1 \\ 2 \end{bmatrix}$ だけで張られる

左零空間は、 $y^T A = 0$ より $\begin{bmatrix} -2 & 1 \end{bmatrix}$ となる

そして、これらは

$$\begin{bmatrix} -2 & 1 \end{bmatrix} \cdot \begin{bmatrix} 1 \\ 2 \end{bmatrix} = 0$$

となり、直交している

また、零空間は行空間に直交するすべてのベクトルを含む

そのような空間を「直交補空間」とよぶ

線形代数の基本定理（その2）

1. 零空間は行空間の直交補空間であり、行空間は零空間の直交補空間
2. 左零空間は列空間の直交補空間であり、列空間は左零空間の直交補空間

$Ax = b$ が解をもつのは $b$ が左零空間に直交しているときに限る

$b$ が列空間にあるのは、 $A^T y = 0$ のすべての解 $y$ に $b$ が直交しているときに限る

部分空間が直交補空間になる条件

$V$ と $W$ が $R^n$ の部分空間の場合、以下の条件のうち<sup>1</sup>つを満たせば直交補空間となる

1.  $W = V^\perp$
2.  $V = W^\perp$
3.  $V$ と $W$ は直交しており、かつ $\dim V + \dim W = n$

## この節と前節の概要

ある行列  $A(m \times n)$  において

①4つの基本部分空間の次元が決定された

- ・行空間と列空間の次元は同じ ( $r$ )

②4つの基本部分空間の方向が決定された

- ・左零空間と列空間は  $\mathbf{R}^m$  においてたがいに直交補空間
- ・零空間と行空間は  $\mathbf{R}^n$  においてたがいに直交補空間

任意の  $x$  は  $x_r$  と  $x_n$  に分解され、この時、行列  $A$  が持つ作用は

$A$  の行空間の成分  $x_r$  を列空間のベクトル  $Ax_r = Ax$  に移す

零空間の成分  $x_n$  を  $0(Ax_n = 0)$  に移す

行空間から列空間への写像は正則  $\Rightarrow$  逆可能  $\Rightarrow$  列空間の全てのベクトル  $b$  がそれぞれ行空間のただ1つのベクトル  $x$  から移される

### 2.5.9

```
clear
A = [1,1,2;1,2,3]
```

```
A =
```

	1	1	2
	1	2	3

```
E21 = eye(2);
E21(2,1) = -1
```

```
E21 =
```

	1	0
	-1	1

```
U = E21 * A
```

```
U =
```

	1	1	2
	0	1	1

```
syms u v w
U * [u;v;w]
```

```
ans =
```

$$\begin{pmatrix} u + v + 2w \\ v + w \end{pmatrix}$$

$$u = -v - 2w$$

$$v = -w$$

$$u = -w$$

$$-w \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \\ -1 \end{bmatrix}$$

よって、 $\begin{bmatrix} 1 \\ 1 \\ -1 \end{bmatrix}$  で張られる空間（直線）

### 2.5.10

解がベクトル(1,2,2)と(1,2,3)の線形結合であるような⇒零空間に解がある

つまり、これらとの内積が0になるようなベクトルを求めればよい

```
clear
A = [1,1,2;1,2,3]
```

```
A =
```

1	1	2
1	2	3

```
E21 = eye(2);
E21(2,1) = -1
```

```
E21 =
```

1	0
-1	1

```
U = E21 * A
```

```
U =
```

1	1	2
0	1	1

```
syms u v w
U * [u;v;w]
```

```
ans =
```

$$\begin{pmatrix} u + v + 2w \\ v + w \end{pmatrix}$$

$$u = -v - 2w$$



$$v = -w$$

$$u = -w$$

$$-w \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \\ -1 \end{bmatrix}$$

よって、 $\begin{bmatrix} 1 \\ 1 \\ -1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x & y & z \end{bmatrix} = 0$

### 2.5.11

$b$ を列空間と左零空間の成分に分解

$$b = b_r + b_{lz}$$

この時

$$b_r = Ax$$

$$b_{lz} = A^T y$$

なので、

$$b = b_r + b_{lz} = Ax + A^T y = Ax$$

### 2.5.12

```
clear
A = [1,0,2;1,1,4]
```

```
A =
     1     0     2
     1     1     4
```

```
P12 = [0,1;1,0]
```

```
P12 =
     0     1
     1     0
```

```
PA = P12 * A
```

```
PA =
     1     1     4
     1     0     2
```

```
E21 = eye(2);
E21(2,1) = -1
```

$$E_{21} = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ -1 & 1 \end{pmatrix}$$

$$U = E_{21} * A$$

$$U = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 2 \\ 0 & 1 & 2 \end{pmatrix}$$

```
syms u v w
U * [u;v;w]
```

$$u = -2w$$

$$v = -2w$$

$$\begin{bmatrix} -2w \\ -2w \\ w \end{bmatrix} = -w \begin{bmatrix} 2 \\ 2 \\ -1 \end{bmatrix}$$

$$x = [2; 2; -1]$$

$$\begin{aligned} &\text{dot}(A(1,:), x) \\ &\text{dot}(A(2,:), x) \end{aligned}$$

$$\text{ans} =$$

$$\begin{pmatrix} u + 2w \\ v + 2w \end{pmatrix}$$

$$x =$$

$$\begin{pmatrix} 2 \\ 2 \\ -1 \end{pmatrix}$$

$$\text{ans} =$$

$$0$$

$$\text{ans} =$$

$$0$$

## 2.5.13

$$(V + W)x = 0$$

$$Vx + Wx = 0$$

この時、 $V$ と $W$ は空間 $\Rightarrow Vx \neq -Wx$ なので、

$$Vx = Wx = 0$$

この辺りは実際の信号処理にどう役立つか

解に自由変数が多い $\Rightarrow$ 制限が少なすぎて、解が定まらない $\Rightarrow$ 実験がうまく収束しない

解がない⇒いくらやったところで理論的な解が得られない⇒実験でできても理由がわからないから製品に使えない

ここの章を理解していると、シミュレーション（モデル）の段階でそれがわかる

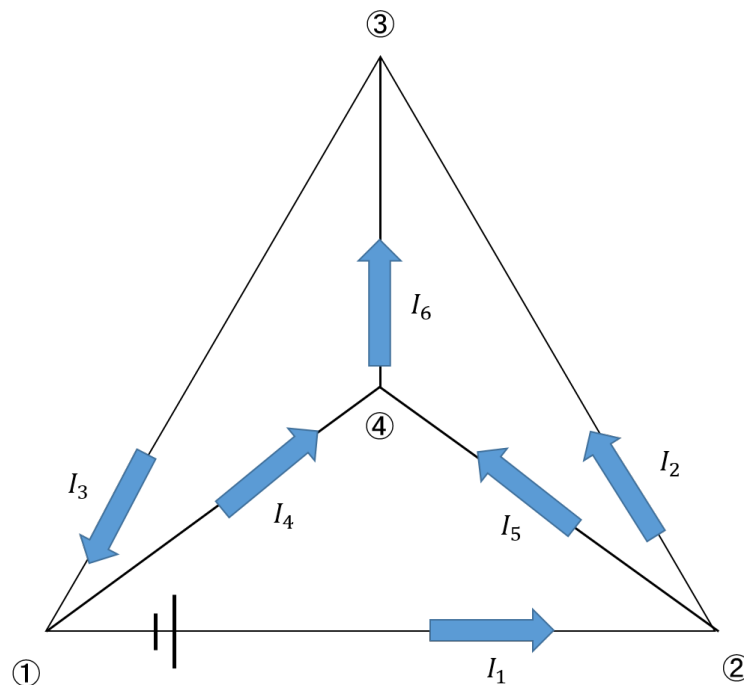
## 生起行列と Kirchhoff の法則

1. 全ての端点で入ってくる電流の和は出ていく電流の輪に等しい  $\sum_{i=1}^N I_i = 0$
2. 全ての閉回路を一巡すれば、電圧降下の和は  $0$  である  $\sum_{i=1}^N V_i = 0$

これらはグラフ理論に関係している

（端点がどのように結ばれているかとその方向に依存し、回路の抵抗には依存しない）

端点間の結合はグラフの生起行列によって記述できる



この図の生起行列は

$$M = \begin{bmatrix} 1 & 0 & -1 & 1 & 0 & 0 \\ -1 & 1 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & -1 & 1 & 0 & 0 & -1 \\ 0 & 0 & 0 & -1 & -1 & 1 \end{bmatrix}$$

となり、行が端点1~4に、列が枝1~6に対応、+1と-1は枝の始点と終点を表す

また、6つの電流によって構成される列ベクトルを  $I$  とすると、キルヒホッフの第一法則により

$$MI = 0$$

となる⇒6つの未知数を持つ4つの方程式

電圧降下に関しては、端点の電圧を $p_i$ 、電圧降下を $E$  とすると電位ベクトル $p$ を用いて

$$M^T p = E$$

となる

このことから、 $I$ は $M$  の零空間にあり、 $E$  は $M$  の行空間にある

また、零空間と行空間は直交しているので、

$$E^T I = 0$$

## 2.5.15

例より

$$p_2 - p_3 = p_3 - p_1 = 5$$

$$p_3 = p_4$$

となり、

$$p_1 = 0$$

より

$$p_1 = 0$$

$$p_2 = 10$$

$$p_3 = 5$$

$$p_4 = 5$$

```
clear
M = [1,0,-1,1,0,0;-1,1,0,0,1,0;0,-1,1,0,0,-1;0,0,0,-1,-1,1]
```

M =

1	0	-1	1	0	0
-1	1	0	0	1	0
0	-1	1	0	0	-1
0	0	0	-1	-1	1

```
p = [0;10;5;5]
```

p =

0
10
5
5

```
E = M' * p
```

E =

-10
5

5  
-5  
5  
0

$I = [2; 1; 1; -1; 1; 0]$

$I =$

2  
1  
1  
-1  
1  
0

$E' * I$

ans =

0

2.5.16

